

▼銀座セゾン劇場 スティーブン・バーコフ演出『サロメ』



- 小空間と劇場の明りづくり——小川 昇
- ニュース/「WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '92」開催

# 小空間と劇場の明りづくり

ひとり芝居『白野弁十郎』の舞台照明

## 小川 昇

### 試演会での照明づくり

島田正吾さんからの依頼で、ひとり芝居『白野弁十郎』の試演会で照明づくりを考えることになりました。

そのいきさつは次のようなものです。

平成元年の10月頃、しばらくぶりに島田さんから電話がかかってきました。

「実は『白野弁十郎』をひとり芝居に構成してみたのだが、それを懇意な人たちに観てもらって試演会をやることになった。場所は東京・荻窪にある娘の嫁ぎ先の家で、24畳ほどの広さの応接間だ。もちろん舞台装置などは全く考えていないが、照明でなにか雰囲気のようなものを出せないだろうか」というものです。

「とにかく現場を見ながら話を聞きましょう」ということで、早速、上演場所である荻窪のお宅で島田さんと会うことにしました。

\*

応接間でおこなわれた試演会はとても好評でした。その後、芝居を観た人たちの勧めもあり、銀座小劇場という客席数が150席ほどの劇場で、この作品を通常の公演として上演することになりました。銀座小劇場での公演も評判を呼び、やがて他の劇場での公演や地方公演の依頼が相継ぐようになり、ひとり芝居『白野弁十郎』は上演回数を重ねていくことになります。

そのなかには、新橋演舞場という大劇場での上演や、島田さんが所属されていた新国劇とゆかりの深い早稲田大学の大隈講堂での上演など、印象に残る舞台がいくつもあります。

そして今年の3月にはこの作品を『シラノ・ド・ベルジュラック』の舞台であるパリで上演するという夢のような企画が実現しました。

ひとり芝居『白野弁十郎』のバリ公演は、応接間で試演会をおこなった頃には思いもよらなかったことですが、島田さんにとっても、また私にとっても感慨深く、大変嬉しいできごとでした。

\*

ところで、小劇場から大劇場までさまざまな舞台上で上演を重ねることになった『白野弁十郎』ですが、この芝居の照明はどこかの会場で上演した時も、最初におこなわれた応接間での試演会と基本的には変わっていません。

「マルモ・ライティング・ニュース」を読んでおられる若い人たち、特に高校の演劇部について考えると、普段は教室や講堂で芝居づくりをおこない、演劇コンクールでは市民会館などの大きい会場で自分たちの作品を上演するといったケースが多いのではないかと思います。

実際に芝居づくりを進めていく教室などの狭い空間と、市民会館などの広い舞台空間の違いにとまどわれた経験を持っておられる人も多いことでしょう。

舞台照明について考えても、教室のような狭い場所では芝居の照明はどう考えたらよいのか、また舞台空間が広がった場合にはどう対応したらよいのか、といったことが芝居づくりのうえでも問題になるところだと思います。

そこで、今回は『白野弁十郎』の舞台照明仕込み図をみながら、普通の家庭の応接間という狭い空間でどのように芝居の明りをつくっていったのか、また、大きな劇場ではどのような要素が加わってきたのかを具体的に説明していきたいと思います。

### 応接間の空間と条件

島田さんからの電話では、試演会を一般の家庭の応接間でおこなうということでしたので、果して芝居ができ

るようなスペースが確保できるのか、また雰囲気づくりに必要な照明器具を設備することができるのか、実際に応接間を見て確かめることが大切でした。

その応接間というのは、話のとおりおおよそ24畳ほどの洋間で、一方にギャラリーのような二階がついています。また、天井は二階まで吹き抜けになっておりかなりの高さがあります。二階の方へ上がってみると、手摺のところにスポットライトを置けそうなスペースがあり、二階と反対側をアクティング・エリアにすれば何とか照明を使って芝居ができるような気がしました。(図1「応接間の平面図と断面図」参照)

しかし、舞台として使おうと思う場所には大きな時計やいろいろな家具が置いてあります。島田さんと相談して、片付けられないものには大きな布を被せて装置として使えるような工夫を考えました。また、部屋の出入口にはありあわせの暖簾を掛けることにしました。この暖簾は第1場の「其日庵」の出入口として使うことになります。

## 照明プランの方針

試演会での仕事は一般の家庭での照明づくりですから、劇場で舞台照明を考えるようにはいきません。

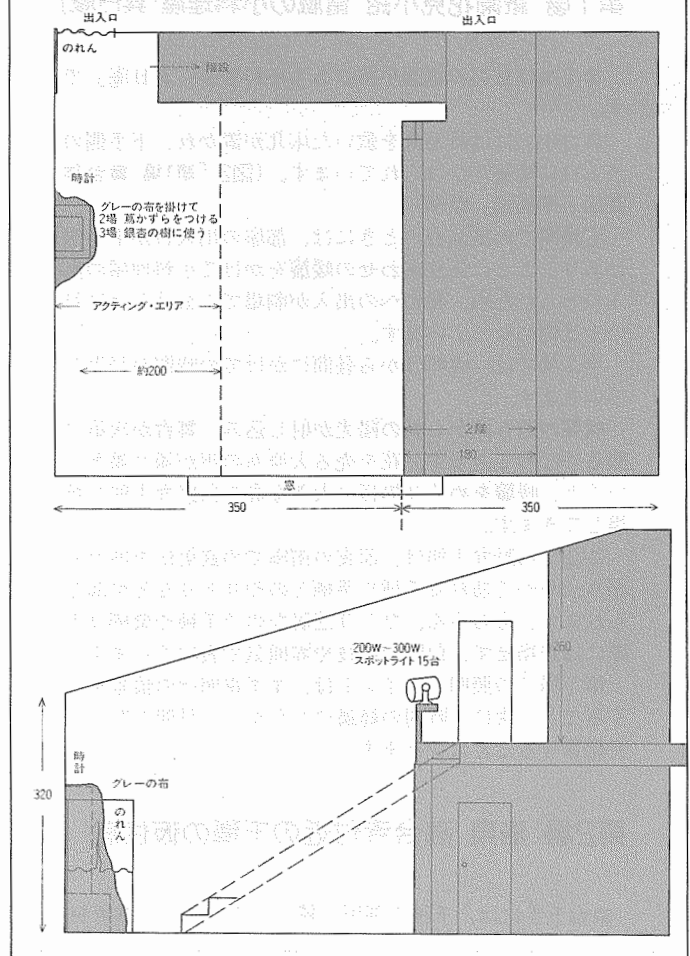
たとえば、スポットライトを置く場所は2階の手摺のところだけです。これでは、舞台照明を考える上での重要な要素である光の方向性が限定されてしまいます。また、電気容量やスペースの関係から、設備できるスポットライトの数にも制限があります。

したがって、照明プランの考え方も光の状態をデッサンし、そこから照明について考えていくといったいつものデッサン的な考えを離れて、ト書きに書かれている各場の条件を満たせる範囲での雰囲気づくりを考えることにしました。

島田さんからの最初の依頼にもあった「雰囲気づくり」を基本的においてのスタートとなったのです。

そこで各場の雰囲気づくりで、ポイントになったことを台本にそって具体的にあげてみましょう。

図1「応接間の平面図と断面図」



なお、参照として掲載した各場の舞台装置図と平面図は銀座小劇場での公演のときのものです。これ以降の劇場公演は、この図面を基本に舞台がつくられました。応接間での試演会では、こうした装置のほとんどは省略されています。



## 『白野弁十郎』について



『白野弁十郎』は、フランスの劇作家エドモンド・ロスタンの原作『シラノ・ド・ベルジュラック』を楠山正雄が訳し、これを額田六福が舞台を日本に置き換えて翻案・脚色したもので、大正15年1月に邦楽座という劇場で新国劇によって初演されました。

この舞台で沢田正二郎氏が演じた弁十郎は絶賛を博し、沢田氏の当り芸のひとつとして新国劇の大きな財産となりました。

沢田氏亡き後、弁十郎の役は島田正吾さんによって受け継がれ、これも沢田氏におとらず迫真の演技が評判を呼び、新国劇の名舞台のひとつとしてしばしば上演されてきました。

今回のひとり芝居『白野弁十郎』は、この伝統を持つ作品を島田さんが自らひとり芝居のために構成したもので、試演会での成功以来、話題と評判を呼び90年から91年にかけてすでに7都市12会場て延べ31回上演され、1992年3月にはパリ公演がおこなわれ、また4月には東京・歌舞伎座で凱旋公演もおこなわれました。

\*

私は、大正15年に沢田正二郎氏が演じた初演の時の照明を担当し、その後の島田正吾さんが受け継いでからの上演に際しても、その照明はほとんどすべてを担当しました。そして、この度のパリ公演の照明も担当したのです。思えばその間、実に66年の歳月が流れていることになります。

今回「マルモ・ライティング・ニュース」で取り上げたのは、ひとり芝居に構成された『白野弁十郎』ですが、私には66年間照し続けてきた元の『白野弁十郎』と別の物とは考えられません。いろいろな条件が違っているので、それに対応した照明づくりをただで、特別にひとり芝居であるという意識はありませんでした。

実は島田さんも元の『白野弁十郎』を一人で演じているつもりの方でした。そこに二人の気持ちの一致する原因があったのだろうと思います。

ちなみに、初演での照明に使用したスポットライトの数は3台でした。劇場にスポットライトが3台しかなかったのです。



## 第1場 祇園花見小路 雷蔵の小料理屋「其日庵」

第1場は京都の祇園小路にある小料理屋「其日庵」です。

舞台中央には緋毛氈を敷いた床几が置かれ、下手側の出入口に暖簾がかけられています。(図2「第1場 舞台装置図・平面図」参照)

応接間での試演会ของときには、部屋の出入口が上手側にあり、ここにありあわせの暖簾をかけて小料理屋の出入口としたため、舞台への出入が劇場での公演とは反対の上手側になっています。

第1場では、夜明けから昼間にかけての時間が経過していきます。

暖簾の透き間から朝の陽光が射し込み、舞台が次第に明るくなってきます。花を売る大原女の声が通り過ぎていくと、暖簾をめくり異様に大きな鼻の白野弁十郎が登場してきます。

ここで白野弁十郎は、前夜の南座での武勇伝を朗々と語り、やがて訪れる千種や栗栖とのやりとりなどが演じられます。もちろん、ひとり芝居なので千種や栗栖は実際には登場せず、白野の演技や雰囲気だけで表現されます。

第1場での照明のポイントは、まず夜明けの情景をつくること。次に、時間の経過にしたがって昼間の明りに変化させることになります。

## 第2場 洛東 高台寺付近の千種の仮住居

舞台上手には、千種の部屋へ続くバルコニーの石垣が

蔭かずに覆われてみえます。

(図3「第2場 舞台装置図・平面図」参照)

時刻は夕暮れ時。白野とバルコニーにいる千種との語りから第2場は始まります。ついで、白野の助言を断わって、千種に恋を語りかける栗栖の失敗が琵琶の調べで巧みに表現されます。すっかり気落ちした栗栖を励まし、自らの思いを抑え、栗栖になりかわり千種に恋を語り始める白野。そして、白野は千種の部屋に栗栖を送り込みます。やがて夜が明け始める頃、会津朱雀隊に集合の連絡が入り、白野は栗栖と伴に長州征伐へと出陣します。

第2場は夕暮れの場面から始まり、夜が更け月明りとなり、やがてしらじらと夜明けが近づいてくるまでの時間が流れていきます。

したがって、この場面ではこうした時間の経過を表現できるような明りの変化が必要になってきます。

## 第3場 京都 五条坂のほとりの尼寺

舞台には大きな銀杏の樹があり、ときおり銀杏の葉が舞い落ちていきます。上手には千種の刺繍台が置かれ、そこでは千種が熱心に刺繍を刺しているという設定で第3場が始まります。(図4「第3場 舞台装置図・平面図」参照)

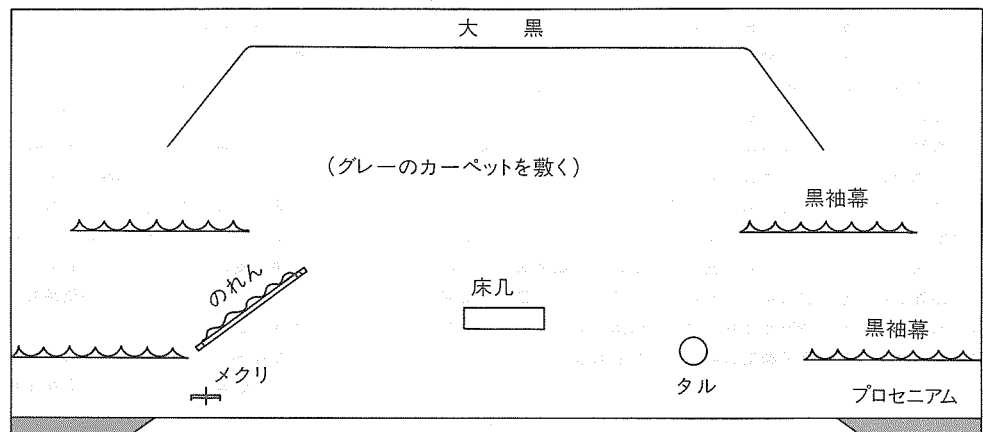
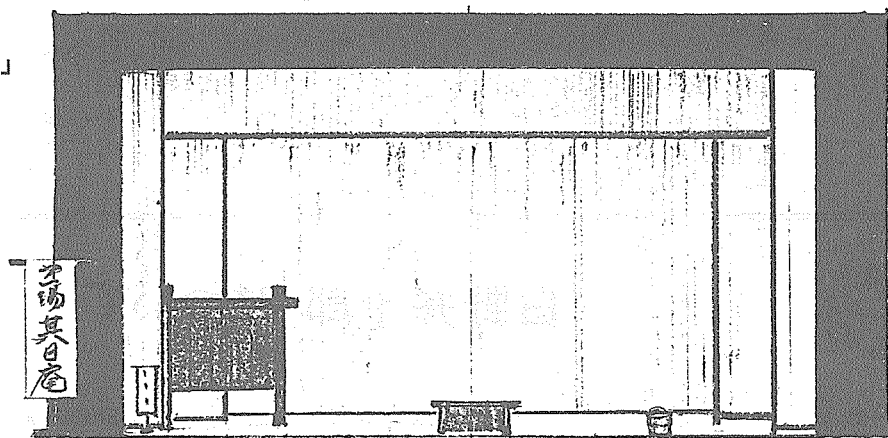
落ちぶれた姿で杖をついて登場した白野は、中央の椅子に腰をおろし、吉祥天女を刺繍している千種に向かって語りかけはじめます。

第3場は夕暮れ近くから始まり、夕陽が沈み、夕闇が深くなり、やがて月明りの中で息をひきとる白野の姿を見せて終わります。

ここでの照明による雰囲気づくりは、夕暮れから夜にかけての明りの変化と、夕闇の暗さから月が出た後の月

図2  
「第1場 舞台装置図・平面図」

第1場は京都・祇園小路にある雷蔵の小料理屋「其日庵」。  
舞台中央には緋毛氈が敷かれた床几が置かれ、上手には椅、下手には暖簾がかけられています。下手の暖簾が料理屋の出入口に設定されており、舞台は下手から暖簾を通して差し込む朝の光で次第に明るくなってきます。



光の明るさをどうつくっていくかということです。  
さらに、この第3場の幕切れを強く印象づけるために、

照明によって劇的な効果をつくりだせないかと考えました。

図3  
「第2場 舞台装置図・平面図」

第2場は洛東・高台寺付近の千種の仮住居。  
舞台下手には白野が演技の中で腰をおろす石が置かれ、上手には千種の部屋に続くバルコニーの石垣が蔦かずらに覆われて見えます。白野が栗栖になりかわって千種に恋を語る場面では、部屋からもれる明りをつくり、その明りの中で白野の演技を見せるように考えました。

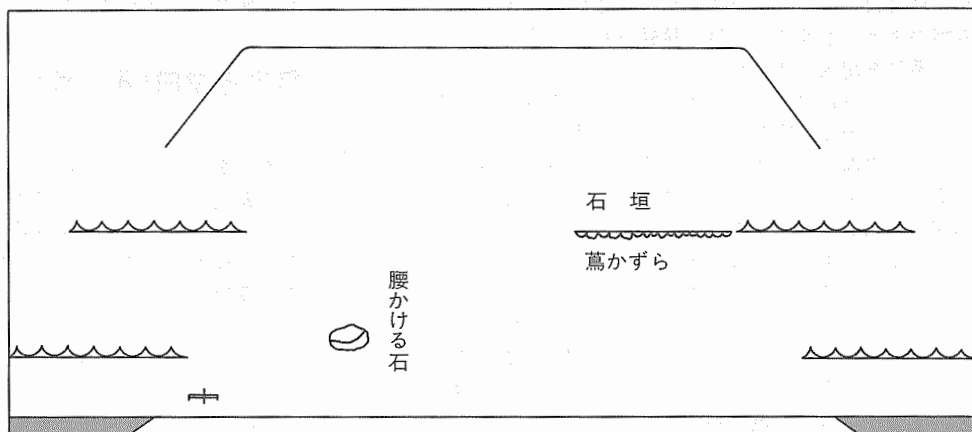
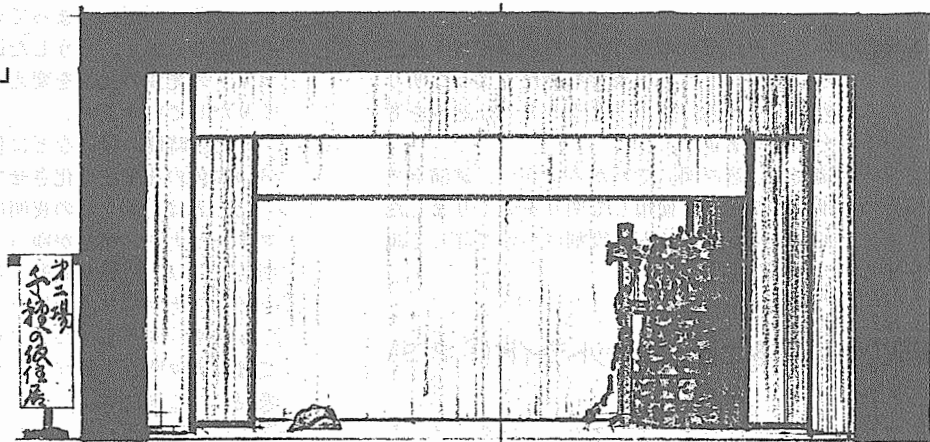
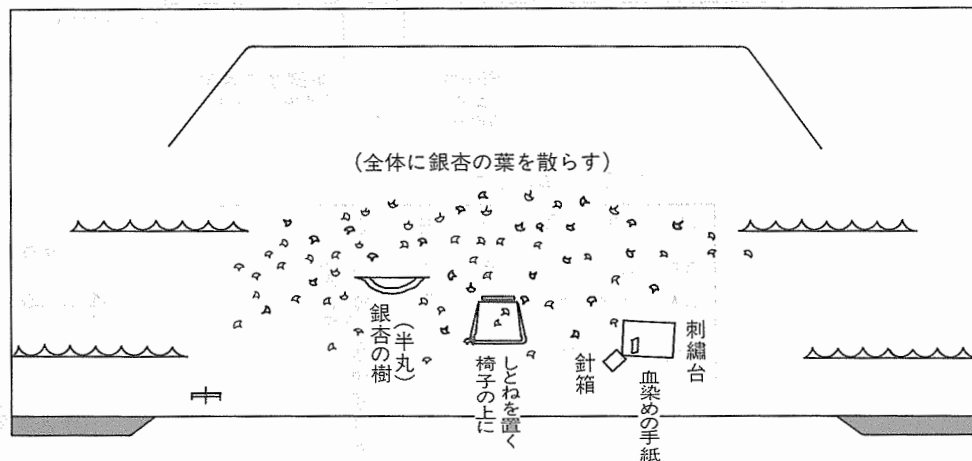
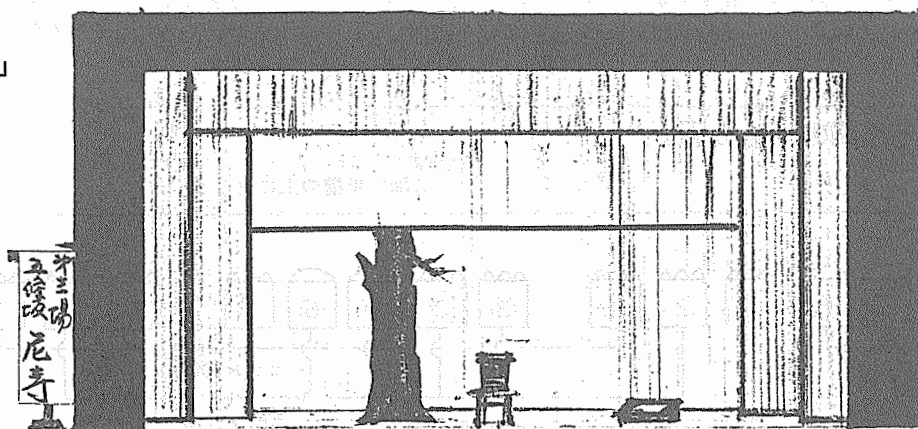


図4  
「第3場 舞台装置図・平面図」

第3場は京都・五条坂のほとりの尼寺。  
下手寄りに置かれた銀杏の樹からは色づいた葉がときおり舞い落ちていきます。舞台中央には椅子が置かれ、ここで白野は刺繍を刺している千種の姿を想定して、刺繍台に向かって語りかけます。千種の存在を観客に強く意識させたい時には、刺繍台を浮かび上がらせる明りをつくりました。



## 試演会での仕込み

各場について、それぞれの明りづくりのポイントを述べてきました。次に、これらの条件を満たすような明りをつくるために、具体的にスポットライトの仕込みを考えていくことになります。

図5「応接間の仕込み図」でわかるように、試演会では15台のスポットライトを使用して明りをつくりましたが、それぞれのスポットライトの役割について詳しく説明を加えていきましょう。

### 場面の雰囲気をつくるスポットライト(①、②、③)

ディムバック調光卓の①、②、③のフェーダには、それぞれ3台のスポットライトが接続されています。仕込み図のスポットライトには、接続されているフェーダと同じ番号を記入しました。

この合計9台は全てフレネルレンズのスポットライトです。ムラのない広がりを持ったフレネルレンズの明りは、その場面全体の明りをつくることに適しています。つまり、「地明り」のためのスポットライトです。その場面の雰囲気やトーンを、このスポットライトでつくることになります。それは、光の種類としては指向性のないフラッドライトになります。

これらの9台のスポットライトは、それぞれ①がカラーフィルターを入れないナマの明り(#W)、②が薄いブルー(#64)のカラーフィルター、③が濃いブルー(#72)というように3つの色にわけられています。

この3つの色を、比率を変えて混ぜ合わせることで、場面全体の明りのトーンや雰囲気をつくっていくのです。たとえば、台本には同じように「夕暮れ」と書いてあ

る第2場と第3場の始めの部分についても、その場の状況や芝居の内容は異なるわけですから、夕暮れの雰囲気も全く違ったものになります。夕焼けを感じさせる夕暮れ、夕闇が間近にせまっている夕暮れなどその表現はたくさんあります。そうした違いを、それぞれのスポットライトの光量の比率を変えて色を混ぜ合わせることでくりだしていきます。

また、時間の経過などに伴う明りの変化についても、3つの色の比率を変化させていくことで表現します。

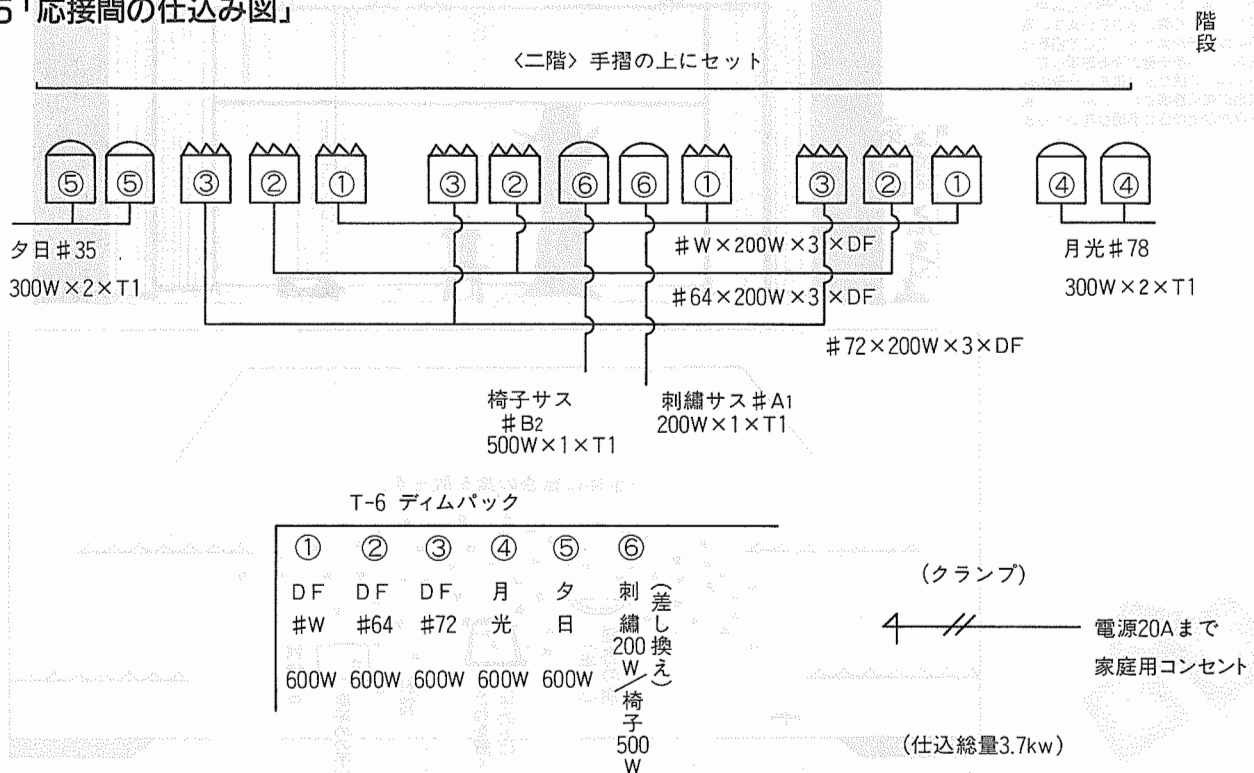
たとえば、第1場の夜明けの場面では、暗い中に薄いブルーとナマの明りがゆっくりと入ってきて舞台全体が明るくなり、時間が経過するにしたがってブルーの明りを抑えてナマ明りの光量を上げ、昼間の明りをつくっていきます。同じように、夕暮れから夜にかけてのシーンでは、ナマ明りを絞りアンバーのトーンで夕日の明りを表現し、これにブルーを少しずつ加えていきます。夜が深まってくると、ナマ明りを落し、濃いブルーの光量を上げ夜の暗さを表現します。

### 月光と夕日(④、⑤)

④と⑤のそれぞれ2台のスポットライトは、月光と夕日を表現するためのものです。この芝居では、第2場と第3場が夕暮れの場面から始まること、バルコニーの場面での月明りや最後の場面の月光が芝居の照明として重要な役割をもっていることなどから、月光と夕日を表現する明りをつくるが必要だと思い、それぞれ2台のスポットライトを仕込みました。

ここでは、スポットライトを設置する場所が限られているので、光の方向性を厳密に設定することはあきらめざるを得なかったのですが、限定された条件の中でできるだけ光の方向性が不自然にならないように工夫をしています。

図5「応接間の仕込み図」



月光のスポットライトと夕日のスポットライトについても、手摺の両サイドに離して設置することで、第3場の夕暮れから月明りへの変化では、夕日は下手から、月光は上手からというように多少は方向性を感じさせるような明りをつくりました。

また、この4台のスポットライトは平凸レンズを使用しています。集光性のある平凸レンズのスポットライトを使うことによって、月明りが差し込む感じや沈んでいく夕日の雰囲気を出すように考えたのです。これは、光の種類としては指向性のあるスポットライトになります。

## 劇的な効果のための明り(⑥)

中央に設置された2台の⑥のスポットライトは、第3幕で使われる椅子サスと刺繍サスの明りです。

仕込み図にはサスと記載されていますが、普通の家庭の天井なので真上からの明りをつくることはできません。この⑥のスポットライトも他のスポットライトと同じように2階の手摺に設置されています。

第3場では、芝居のクライマックスが訪れます。暗闇の中で手紙を読む白野の姿を見て、栗栖からの手紙や恋の言葉が本当は白野のものであったことに初めて気がついた千種。そして、千種が白野の心の内を察した時、まさに白野は息絶えようとしています。

ここでは、刺繍サスによって刺繍台を浮かび上がらせることで、実際には登場していない千種の姿を観客にイメージさせる方法がとられています。芝居の流れの中で、千種が存在を表現したい時には、刺繍台は明るく浮かび上がり、白野はその明るさに向って語りかけるのです。

同じ⑥の椅子サスは、幕切れの劇的な効果をつくるための明りです。

降りしきる銀杏の葉の中、椅子に腰を下ろし、やがて息絶える白野。次第に暗くなっていく舞台上で椅子サスの明りが白野を捉え、観客にその姿を強く印象づけます。

フォロー明りとして使ったこの椅子サスも、刺繍台を明るくした刺繍サスも、集光性のある平凸レンズスポットライトを使用しています。芝居の照明の重要なアクセントとして、その効果をできるだけ印象深く表現したいと思ったからです。

雰囲気づくりを基本に考えてきた試演会での照明ですが、最後のシーンのためだけに用意された⑥のスポットライトで初めて劇的な効果を演出しました。

## 小空間での照明の考え方

応接間や学校の教室のように限られた条件の中では、たくさんの方を照明で表現しようと思っても不可能です。まず、全体の雰囲気をつくることを基本に置き、雰囲気づくりの明りの中で役者が見えるような明りを考えます。その上で余裕があったら、芝居の中で最も重要だと思われる場面に対して、照明による劇的な効果を考えていくとよいでしょう。

応接間での試演会でも、地明りでその場面全体の明りをつくることを最初に考えました。この地明りが雰囲気をつくると同時に、役者をみせる役割も果たしています。次にその明りを補助し、場面の雰囲気や状況をよりわかり

やすくするために月光と夕日の明りを加えました。そして最後に、この芝居の演出上のポイントが第3場の幕切れにあると思いましたので、そのシーンのためだけにスポットライトを用意しました。

もし、さらに余裕があったら、その他の場面もきめ細かく、あるいは劇的に表現するような仕込みも考えられたことでしょう。しかし、応接間の条件では、これが精一杯の仕込みでした。

わずかな仕込みでも、その芝居のポイントになるひとつのシーンを選び、そこに力を注いで効果的な明りをつくっていくと、観客に強い印象と感動を与えることができるものです。まず、与えられた条件の中で、限られた力をいかに有効に発揮していくか、そのことに考えを集中してみてください。

## 電気容量の問題

一般の家庭はもちろん、舞台照明用の設備が整っていない場所で照明を考える時に最もネックになるのが電気容量の問題です。

試演会をおこなった家でも電気の容量は3KWが限度でした。

使用するスポットライトを15台と想定しましたが、15台のスポットライトの電気容量を3KWの範囲に収めなければなりません。そこで、スポットライトの電球を200W~300Wのものに取り替え、スポットライトの数は減らさずに、容量の問題を解決することにしました。

図5の仕込み図でもわかるように、結果的には仕込総量は3.7KWになりました。しかし、上演中に全てのスポットライトを同時に使用することはないので、容量オーバーにはならず明りをつくることができました。

また、家庭での上演ならではのエピソードとして忘れられないのが、冷蔵庫のサーモスタットです。約13~15分おきにサーモスタットが作動し電力が少しダウンするので、これを考慮に入れることが必要でした。

そのほか、雑音をひろわないように音響とは別の平行コンセントを使用するなど、現場では細かい配慮をおこなっています。

## その場にあった劇空間をつくる

今回の応接間のように、芝居を上演するための条件が整っていない場所で照明づくりに取り組む方法のひとつとして、そのための設備を準備するやり方があります。

電気容量の制限を解決するためには、電源車を用意することが考えられます。また、スポットライトの数を増やしたり、光の方向性をできるだけ自由に選べるようにトラスを組むこともできるでしょう。

そうすることで、舞台照明によるさまざまな表現が可能になります。

しかし、身近な人だけが集う応接間という空間で、演じる人とそれを観る人々が一体となるような芝居が上演される時、そこに必要なのは十分な設備やたくさんの照明器具ではなく、その空間にあった雰囲気づくりだと思います。

試演会が成功したのは、応接間という空間にふさわしい劇空間をつくることをこころがけたのが一因だと思





ことは、アクティング・エリアに対しての光の方向、角度が違ってくるといことです。

したがって、上演する劇場によって異なる照明設備の条件の基で、同一の照明効果を舞台につくるためには、それぞれの劇場で修正や変更が必要になるわけです。

## 舞台装置に対する明り

仕込み図をさらによく見ると、劇場で仕込まれるスポットライトの数が増えた理由として、空間の広がりへの対応のほかに、装置に対する明りが増えていることがあげられます。

すでに掲載した装置図と平面図でわかるように、銀座小劇場から舞台装置がつくられました。

応接間では、部屋の出入口にありあわせの暖簾をかけたり、時計などの家具に布を被せ、そこに葛かずらを絡ませてバルコニーに見立てたり、銀杏の葉を散らして銀杏の木に見立てたりしていましたが、劇場の公演ではそれぞれの装置が組まれることになりました。

装置が組まれると、その装置に対しての明りがつくられることになります。仕込み図を見ると、立木へのタッチ明りや、バルコニー、葛かずらなどへの明りをつくるために、スポットライトが仕込まれているのがわかります。こうした装置に対する明りが加わることで、その場面の雰囲気はいつそうきめ細かく観客に伝わっていきます。また、時間の経過を表現する明りの変化も、装置へのタッチ明りを利用することでやりやすくなります。

このように、照明の基本的なプランについては試演会るときと変わってはいませんが、空間の広がりに対応して光量を増やし、さまざまな制限がなくなったぶん装置へ

の明りなどを追加したため、仕込み図が複雑にみえるようになったといえるでしょう。

## アクティング・エリアについて

最後に、これは演技とも関係してくるのですが、劇場での公演のときにはどの劇場でも、アクティング・エリアは同じ広さで上演しています。大きい劇場で、舞台が広いからといって、アクティング・エリアを広げということはしていません。

広い舞台でも、装置は同じ位置に設定し、余分な空間を黒幕でせめて、同じ広さのアクティング・エリアをつくるようにしているのです。

こうした舞台の使い方が、観客に不自然に見えるのは、舞台を縁どる形になる黒幕がちょうど絵画の額縁の役割を果たすからだと思えます。大きな額縁に小品の絵画がうまく収まっているのを見ることがありますが、舞台がそのような状態になるのだと思えます。

もちろん、絵画にはそれにふさわしい額縁が選ばれるように、舞台を縁どる黒幕もただの幕として見えるのでは、そういった効果は望めません。舞台でつくった明りのハレーションなど照明によって、黒幕を額縁の役割を果たすように見せることができるのです。

このことは、ことばではなかなか説明しにくいことですが、もし大きな会場で芝居を上演する機会があり、その舞台空間の広さにとまどうようなことがあったら、黒幕を使って額縁づくりを試みてください。実際に舞台でやってみると、案外簡単に自分たちの芝居にふさわしい空間がつかれるかもしれません。

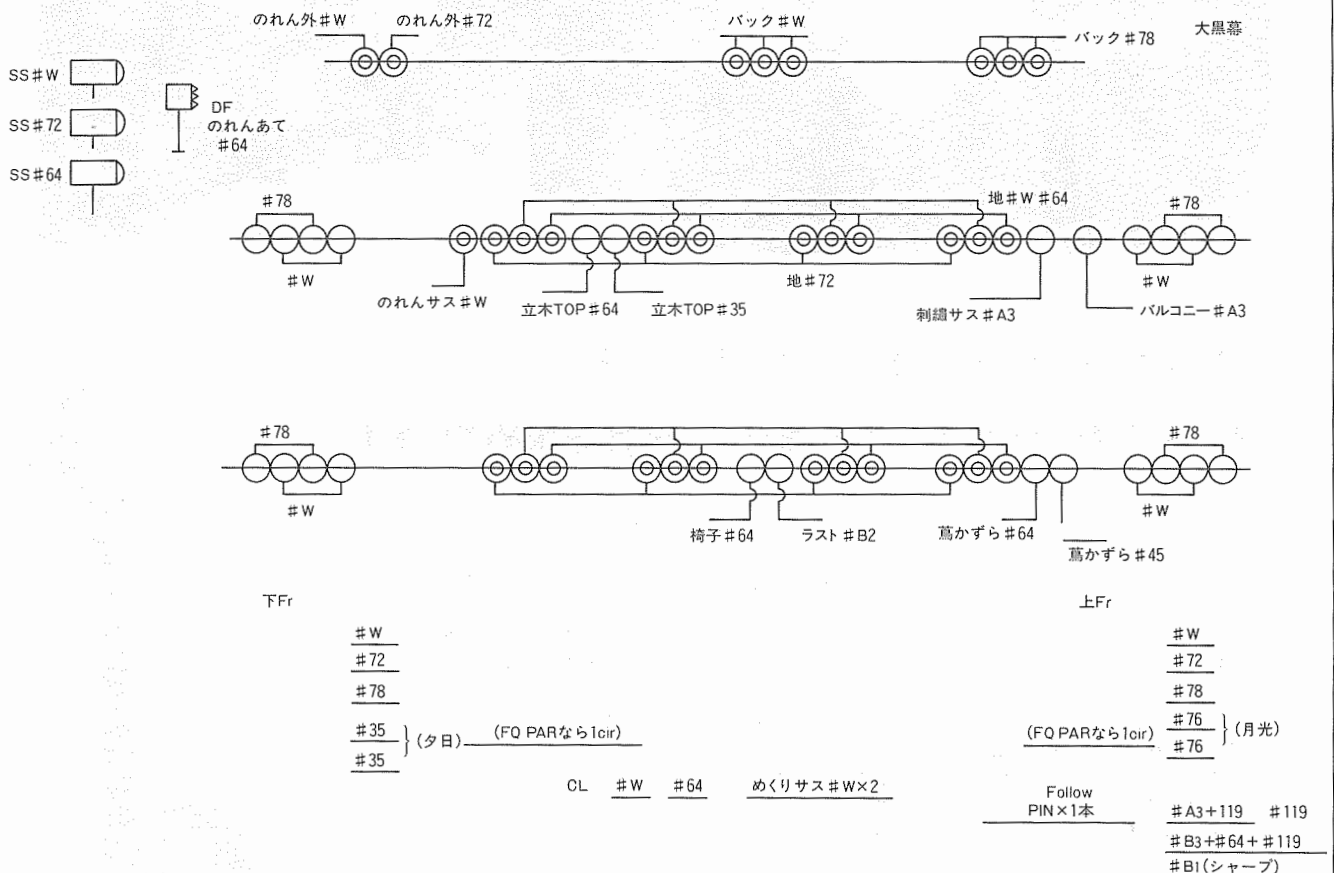


図7「新橋演舞場の仕込み図」

# 「白野弁十郎」パリで公演 小川昇氏が芸術文芸勲章を受賞

今号に掲載されました「小空間と劇場の明りづくり」にもあるように、小川昇氏が照明を担当されたひとり芝居「白野弁十郎」が、3月17日と18日の二日間、パリの小劇場「メゾン・デ・キュルチュール・ドゥ・モンド(世界文化の家)」で上演されました。

白野を演じる島田正吾氏は86才。その舞台照明に携わる小川氏は93才。高齢ながら第一線で活躍を続け、パリ公演という夢を実現させていく二人のパワーには、舞台づくりに寄せられる限りない愛情と情熱の深さを感じられます。

パリでもこの公演は注目をあつめ、劇場の下見や公演にむけての準備の間をぬって、TV局のインタビューをはじめ、マスコミの取材が相次ぎ、新聞、雑誌でも大きく取り上げられました。

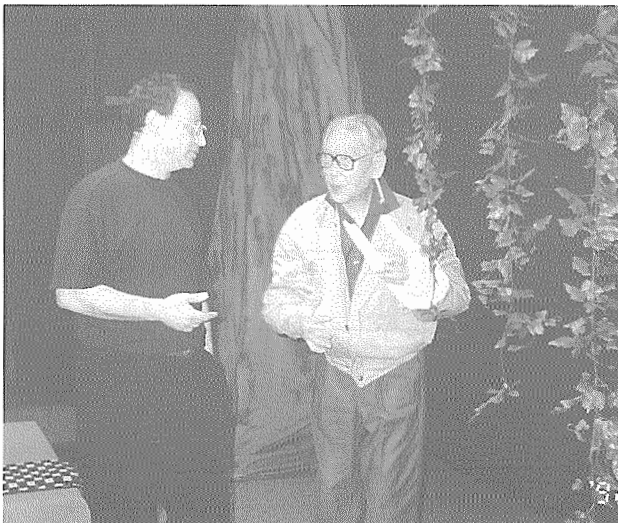
仕込み中の劇場には小川氏に師事し、今回のパリ公演の実現に力を尽したフランスの照明家ジャン・カルマン氏も訪れ、また18日の公演には、日本での「シラノ・ド・ベルジュラック」の日本公演を終えて帰国したばかりのジャン・ポール・ベルモンドが観劇するなど、話題の多い公演となりました。

なかでも特筆されるのは、小川氏と島田氏にフランス政府から芸術文芸勲章(シュバリエ賞)が授与されたことです。

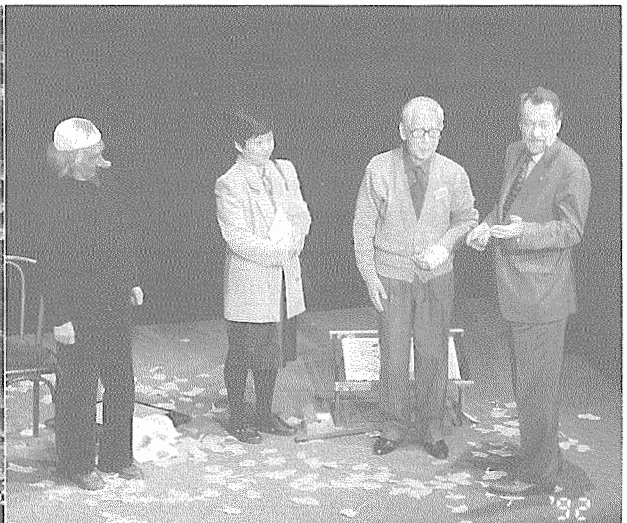


この賞は、フランスと世界の文化への多大な貢献に対して贈られたもので、18日の終演後、島田氏の熱演の余韻が残る舞台上で受賞のセレモニーがおこなわれました。

ここでも、舞台づくりに注ぐ二人の情熱に対して、ユーモアとウィットに富んだ称賛の数々のスピーチがよせられ、観客席からは暖かい拍手がわきおこり、劇場はパリ公演の成功を象徴するような心暖まる雰囲気になっていました。



▲仕込み中の舞台の小川氏とフランスの照明家ジャン・カルマン氏。



▲舞台でおこなわれた芸術文芸勲章の授賞セレモニー。

## MARUMO HOT LINE

### MARUMOでは若い力と瑞々しい感性を求めています。

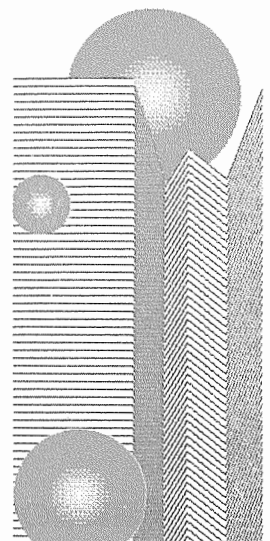
演劇やミュージカル、そしてロックコンサート。舞台にはいつも感動が溢れています。この感動を一層鮮やかに演出し、創造していくのがステージライティングの仕事です。MARUMOは舞台照明設備の総合メーカーとして、美しい光で多彩なライティングを実現するために、さまざまな照明器具や照明設備の研究・開発に力を注いでいます。

コンピュータ技術を導入し、最新テクノロジーを駆使しながら開発されていく新しい製品の数々。MARUMOの優れた性能と機能をもつ照明器具や照明設備は、日本の主要な劇場やホールに、また全国各地の公共ホールに、さらにはTVスタジオやホテルなど、さまざまなところで活躍しています。

東京の本社、技術センター、そして山梨工場を結ぶネットワークを基に、ライティング表現の未知の世界に挑み続けるMARUMO。

MARUMOでは、技術開発や新しい劇場づくりの最先端で活躍するエネルギッシュな若い力と、感動を大切にする瑞々しい感性を求めています。

詳細につきましては、MARUMOの総務部までお問い合わせください。



## WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '92

### 開 催

来る6月24日(水)から26日(金)にかけて、全国舞台テレビ照明事業協同組合の主催による「WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '92」が、日本コンベンションセンター(幕張メッセ)にて開催されます。

世界の照明業界を視野に入れて催されるこのイベントでは、最新の照明機器の展示や、第一線で活躍されている各国の照明家などを講師に迎えての特別セミナーなどが予定されており、これからの日本の照明業界の発展と向上のために、また新しい情報の交流の場として、多大な成果と影響力をもたらすものと考えられます。

そうしたライティング・フェアの意義と趣旨を踏まえながら、MARUMOでは今日まで弊社を支えていただいた方々への感謝と、世界へ向けてのさらなる飛躍を期するために、

あらためて「歴史」と「信頼」について見つめ直してみたいと考え、独自のコンセプト・タイトル「Emblem」をテーマに出展をおこないます。

出展ブースの〈ディスプレイ・ゾーン〉では、1919年の創業以来、MARUMOが培ってきた照明技術の成果を、数々の照明器具、最新の調光システムなどを中心に紹介します。

また、MARUMOの歴史と技術の歩みをたどる写真パネルなども展示されますので、照明技術の進歩に思いをはせながら、楽しいコミュニケーションの場としてひとときをお過ごしいただきたいと思います。

お誘い合せの上、MARUMOのブースへの多数のご来場をお待ちいたしております。

**[場 所]** 日本コンベンションセンター  
(幕張メッセ)  
国際展示場 3  
**[日 時]** 6月24日(水)~26日(金)  
10:00~18:00(26日のみ17:00まで)  
**[入場料金]** 1,000円

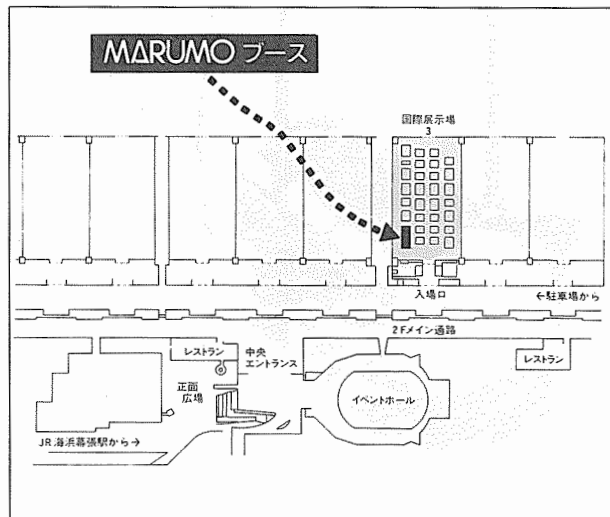
#### [会場までのアクセス]

電車をご利用の場合

- 東京駅乗り換え  
JR京葉線東京駅一海浜幕張駅下車
- 地下鉄有楽町線新木場駅乗り換え  
JR京葉線新木場駅一海浜幕張駅下車

お車をご利用の場合

- 東関東自動車道 湾岸習志野I.C
  - 京葉道路 幕張I.C
- (駐車場は有料となります。)



# WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '92

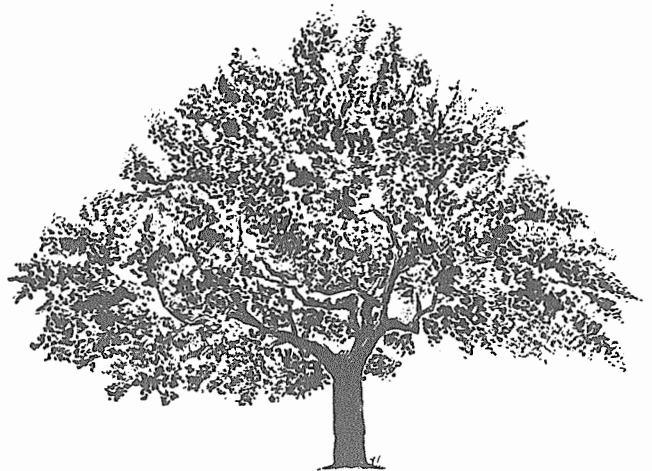
## 入場券 プレゼント

「WORLD LIGHTING FAIR IN TOKYO '92」の入場券を、抽選で30名の方にプレゼントいたします。ご希望の方は、官製はがきに①住所、②氏名、③年齢、④職業(学生の場合は学校名)、⑤電話番号を明記の上、下記の宛先までお申し込みください。なお、当選者の発表は入場券の発送をもってかえさせていただきます。

#### ●申し込み先

〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 丸茂電機株式会社  
「マルモ・ライティング・ニュース」編集部  
入場券プレゼント係

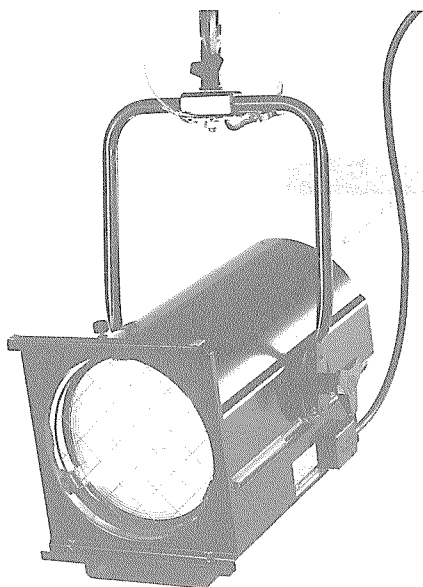
## Emblem



Since 1919

## LNシリーズ 低騒音型スポットライト

コンサートホールが求めた静寂のスポットライト。  
演出空間にピュアな静かさを創造する光の最新技術。



静粛なクラシックコンサートの幕開き、  
切々と語りかけてくる芝居でのモノローグ。  
観客の心は研ぎ澄まされて、  
その一瞬の静けさや、  
微妙なセリフのニュアンスに感動を深めています。  
水を打ったような静けさこそが、  
人々のイマジネーションを豊かに広げていくこうしたシーンでは、  
わずかなノイズさえも、  
演出効果を著しく損なってしまうものです。  
MARUMOでは、より深い静けさの中の演出空間を創造するために、  
スポットライトの点灯、消灯に伴う  
灯体からのノイズ発生の低減化を実現しました。  
静寂の中に、鮮やかに輝くライティングワールド。  
MARUMOが誇る新しい光のテクノロジーです。

### ■LNシリーズ低騒音型スポットライトの特長

- **ノイズ発生を極力低減し、静かさを実現**  
スポットライトの点灯、消灯時に生じるノイズの発生メカニズムを徹底的に解明。新たな灯体材料と構造設計を取り入れ、ノイズ発生を低減。静かなスポットライトを実現しました。
- **灯体は3タイプ**  
シーリングやサスペンションなど、照射距離の異なる使用目的に合わせて、灯体はショート、ミディアム、ロングの3タイプを用意。灯体の長さだけが異なるシンプルな統一デザインです。
- **各種レンズに対応**  
使用目的に合わせて光の質を選択できるように、平凸レンズ、フレネルレンズ、ハイベックスレンズの各種レンズを備えたスポットライトが揃っています。
- **電球交換は簡単なワンタッチ操作**  
電球は裏蓋を開けてワンタッチで交換。ミラーを倒すと連動してソケットが緩むので、ハロゲン電球の口金をつかんでの着脱ができ、バルブに触れる心配がありません。
- **1000Wと1500Wを用意**  
全機種に1000Wと1500Wの2タイプを揃えています。

### ■仕様

- **灯体** / 軽合金製
  - **塗装色** / 黒半艶  
アイボリー半艶
  - **反射部** / アルミニウム(鏡面加工)
  - **レンズ** / ハイベックスレンズ  
フレネルレンズ  
非球面平凸レンズ
  - **使用電球** / JP100V1000W/G-D  
JP100V1000WB/G  
JP100V1000WC/G  
JP100V1500W/G-D  
JP100V1500WB/G-3
  - **付属品** / 色差棒(245×245mm)  
落下防止ワイヤー
  - **オプション** / バンドアー
  - **コード** / 2<sup>φ</sup>m × 2芯 1.5m  
T型20Aプラグ付
- ※仕様は改良のため予告なく変更することがあります。



● 発行———丸茂電機株式会社  
〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(3252)0321(代)  
● 編集責任者———丸茂正俊  
編集協力———小川昇舞台総合研究室 レクラム社

● このニュースは弊社からお届けします。

● マルモ・ライティング・ニュースは、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は、丸茂電機(株)までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。